

戦前の先人たちはいかに国難を乗り越えてきたか

拓殖大学顧問・前総長 渡辺利夫

(聞き手＝拓殖大学海外事情研究所所長・教授 川上高司)

中国の脅威はますます増加し、世界で猛威を振るう新型コロナウイルスは、わが国でも急速に拡散して未だ収束の兆しは見えない。振り返れば、戦前わが国の先人はこうした様々な国難を乗り越え国家の礎を築いてきた。今後、わが国は迫りくる様々な試練をどう乗り越えてゆくべきか。わが国の近代史に精通する渡辺利夫本学顧問に話を聞いた。

――戦前、わが国はロシアの南下という大きな国防の試練に立たされました。渡辺先生は以前『アジアを救った近代日本史講義――戦前のグローバリズムと拓殖大学――』というご著書を出版されましたが、それを踏まえまして、本学の創立者でもある当時の桂太郎総理や本学の学長を務めた後藤新平台湾総督府民政長官の先輩たちがどのように国家の危機を乗り越えていったのかお聞かせください。

渡辺 もう五〇年ほど前のことですが、チャールスト

ン・ヘストン、デヴィッド・ニーブン、エバ・ガードナー、丹波哲郎などの名優たちが演じた『北京の五五日』という映画がありました。この映画は明治三二年（一九〇〇年）に起こった、数方の清国義和団と北京公使館地域に住まう連合八カ国軍の死闘を描いた名作です。

瓜を地上に落とすと、バラバラに割れてしまいますよね。これを中国では「瓜分」と言います。当時の中国、つまり清国に列強が入り込んでそこに支配の手を伸ばし、また列強相互の間にも強い確執が満ちていました。帝国



わたなべ・としお

拓殖大学顧問、前総長、元学長。1939年生まれ。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て拓殖大学に奉職。専門は開発経済学・現代アジア経済論。(公財)オイスカ会長。日本李登輝友の会会長。平成23(2011)年、第27回正論大賞受賞。著書に『成長のアジア 停滞のアジア』(講談社学術文庫、吉野作造賞)、『開発経済学—経済学と現代アジア—』(日本評論社、大平正芳記念賞)、『神経症の時代』(文春文藝ライブラリー、開高健賞正賞)、『後藤新平の台湾』(中央公論新社)など多数。

主義の時代とはかくある、という話をひとつのストーリーで表せばこうなることを示した名作が『北京の五五日』です。

実際、一九世紀が終わる頃には、ドイツが膠州湾に進軍してここを海軍根拠地とし、ついでイギリスが山東半島の威海衛を、さらにフランスが広州湾の租借権を手に入れていたのです。「瓜分」ですね。

列強の中でも最も頑強な帝国主義国がロシアでした。ロシアの南下政策は大変に強引なものでした。日本は日清戦争に勝利し、清国に「事大」してきた朝鮮の自立を可能にしたのですが、朝鮮にはロシアに「事大」しよう

という政治勢力が力を得ました。ロシアもチャンス到来と半島に一拳に影響力を強めました。日清戦争での勝利によって日本が清国から割譲された遼東半島も、三国干渉によって清国に還付を余儀なくされるのですが、この半島も後にロシアの租借地となっていたのです。

対ロシアで発揮された桂太郎の力量

日本を取り巻く当時の極東アジアの国際政治情勢とはかかるものでした。こういう情勢を背景に登場した政治家が桂太郎です。元勳がひとりとして加わることのない若い世代の閣僚です。陸軍大臣に兎玉源太郎、海軍大臣に山本権兵衛、外務大臣に小村寿太郎を充てました。

義和団事変での水際立った貢献により、日本は列強の一員とみなされ、さらに日英同盟の締結に成功し、日露戦争に勝利して朝鮮併合を実現、不平等条約の改正などをやり遂げていったのです。明治期日本の懸案をことごとく片づけた政治的リーダーたちでした。これほどの大仕事をなした内閣は、日本の近代史の中でも他に例をみないほどですね。

ロシアという、当時世界最大の陸軍国家に挑んでこれ

に勝利するなんて大変なことです。ロシアという露悪的なまでに帝国主義的な国家の悪に対する日本人の恩讐がきわめて強く、この恩讐をナショナリズムにまでまとめ上げていった桂内閣の力量には人いなるものがあります。加えてイギリスとの間に日英同盟を結んで後方からロシアを牽制するという、小村寿太郎を中心とする当時の外交戦略は、文字通り機略に富んだものでした。

現在の東・南シナ海に向かう南下政策の主役は中国です。これを牽制する同盟が日米同盟です。日露戦争当時の国際関係、外交政策を現在の時点で洗い直してみますと、いろんなことがみえてくるのではないのでしょうか。

——現在、コロナ禍で世界的な混乱が続いています。わが国では日清戦争時「コレラ」や「チフス」などの疫病が蔓延していた中国大陸から帰還した兵士の伝染病対策に苦慮したことがあります。そしてその時、伝染病対策に辣腕を振ったのが本学第三代学長の後藤新平でした。当時、後藤はどのように伝染病の流行を防いだのでしょうか。また、後藤の対策から現代のわれわれが学ぶものがありましたらお聞かせください。

渡辺 後藤の検疫事業は、確かに大事業でしたね。日清戦後の明治二八年（一九〇五年）の六月初めから八月末

までに期間が設定され、その間に六七八艘の船舶と二三万人余の兵士の検疫事業を展開することになったのです。広島（広島）の似島、下関の彦島、横浜の桜島の離島が舞台でした。

この三カ所の検疫所で罹患が証明された兵士の数は、真性コレラ三六九人、疑似コレラ三二三人、腸チフス一二六人、赤痢一七九人だったと記録されています。この数の罹患者が検疫なくして国内の各地に帰還していった場合の事態の深刻さは、いかばかりのものだったでしょうね。

日清戦争後の検疫事業は、往時の日本の政治指導者がこれを「国家緊急事態」として認識したがゆえの成功でした。検疫事業の遂行に一瞬の戸惑いがあったとすれば、日本国内はいかに由々しい事態に陥っていたか。二〇二〇年における新型コロナウイルスのあの急速な拡散の有り様をみていると、指導者が「初動」においていかに迅速に立ち居振る舞うか、ポイントはやはりここにあるのでしょうか。現代の視点からみても後藤の初動にはみるべきものがあったと私は考えます。

——後藤新平学長は、台湾統治でも民政長官として台湾の伝染病対策に心血を注ぎました。後藤は、どのよう

にしてこのような困難を乗り越えていったのでしょうか。
渡辺 対策というより、対策を可能ならしめた後藤の統治思想について考える必要があるんじゃないでしょうか。李登輝元総統も問うべきは後藤の思想だと言っていましたよ。

日本が台湾を領有したのは、日清戦争勝利によつてですが、それから第二次大戦での日本の敗北により「台湾放棄」を余儀なくされるまでの半世紀にわたり、台湾は日本の統治下に置かれました。この間、拓殖大学のOBたちはこの地の開発と経営に大いなる貢献をしてきました。拓殖大学が台湾協会学校として設立されたことは、皆さんご存知のことですよ。

台湾の政治安定の帳を開いた後藤新平

日本が新たに領有した台湾は、反日武装勢力の制圧、熱帯病とアヘン常習吸引者の排除など、考えてみるだけでもうんざりするほどの難題を抱えた島、「難治の島」だったのです。樺山資紀、桂太郎、乃木希典の初期三代の総督の時代、台湾の開発と経営にはほとんど前進がありませんでした。

台湾統治に曙光がみえたのは、総督に児玉源太郎、総督府民政長官に後藤新平のトップが就任して以降のことです。後藤新平は、権力と権威において比類なき軍人・児玉を後ろ盾とし、後藤に固有の「生物学の原理」に基づく施策を立案、政策化し、ついに土匪制圧、アヘン禍駆逐、熱帯病の克服に成果を収め、その上で南北縦貫鉄道、基隆・高雄の築港などのインフラ整備にも乗り出して、台湾の政治的安定と経済成長への帳を開いたのです。

児玉、後藤の成果を先取りして言えば、領有後一〇年の明治三八年（一九〇五年）度において日本からの補助金支出はゼロとなりました。つまり、この時期以降、台湾は本土との国庫収支からみる限り本土側の黒字となったのです。ちなみに、朝鮮は併合以来これを手放すまで、終始、本土側の赤字でした。

ところで、後藤の「生物学の原理」ですが、こう言えればわかってもらいやすいのではないかと思います。

「個々の生物の生育にはそれぞれ固有の生態的条件が必要であるから、一国の生物をそのまま他国に移植しようとしてもうまくいくはずがない。日本の慣行や法律や制度をそのまま台湾に持ち込んではいけません。むしろ、台

湾に古くから存在している「旧慣」を究め、これに見合うようさまざまな工夫をしていかなければ、異文化での植民地経営などうまくいくはずがない”

実にまっとうな思想と言うべきです。後藤は台湾に根づいてきた旧慣「保甲」の中に自治制を発見し、これを社会の末端に息づく制度として確定したのです。住民の一〇戸を一甲とし、一〇甲を一保とし、各地の保甲はそれぞれの行政警察の指揮と監督を受け、相まって地方行政の末端を担う住民組織として機能させたのです。土匪制圧に最大の力を発揮したのは、全島の津々浦々に根を張る保甲の力によってでした。アヘン常習吸引者の監視、公衆衛生管理などを担ったのも保甲でした。

検疫事業で後藤がみせた鮮やかな「初動」、台湾で実証された「自治制」の有効性、これなど、コロナ禍にあつて私どもは一度、深く回顧しておく必要があると感じています。

——後藤の台湾統治に大きな貢献を果たしたのが、本学学監新渡戸稲造でした。新渡戸は困難が伴う台湾でどのように手腕を発揮したのでしょうか。

渡辺 新渡戸稲造という人物を登場させたのも後藤新平です。台湾財政の自立化には製糖業の発展が不可欠だ

と後藤はみて、農学者の新渡戸の抜擢を決意します。体力に自信のない新渡戸は逡巡したのですが、自分の能力を求めている同郷・盛岡のすてにして独自の統治思想、その行政能力に対する高い評価が定まっていた後藤の要請をむげに断ることはできない。”士は己を知る者の為に死す”という武士道のフレーズが頭をよぎったそうです。熟慮を重ねて台湾赴任を決意しました。

後藤の志を継いだ新渡戸稲造

新渡戸は総督府殖産課長を命じられ、ここで後藤より「糖業改良意見書」を直ちに提出するよう命じられました。台湾が財政自立をするための切り札が糖業です。しかし、新渡戸は台湾に赴任してまだ三カ月、台湾の現状についての自分の知識はほんのわずかだ、すでにオランダによって確立されているジャワの製糖業を一カ月ほどいいから視察させてくれと要請したのですが、後藤はこの要請に応じました。そして新渡戸がジャワから帰ってきたところで、新渡戸と後藤の間で次のような会話が交わされたという記録が残っています。

「君、すぐに意見書を書いてくれ」

「わずか一カ月ばかりジャワをみて回っただけです。

意見書は台湾をよく調査してから書きます」

「いや、調査はこれ以上しなくていい。むしろ台湾の実情など知らないうちに書いた方がいい。君が台湾の実情を詳しく調べていると目が痩せてきて思い切った改良案が出せなくなる。ジャワをみてきたその日の乾かないうちに書いておくれ。難しいこともあろうが高い所からみたその目で書いてもらいたいんだ」

新渡戸には後藤のこの物言いが、ぐさりと胸に突き刺さったようです。後藤は行政的な「軍略家」として台湾の戦場で戦っているんだ。後藤が求めているのは学者の論文などではない。限られた時間の中で最善の策を絞り出さなくてはと、新渡戸は後藤の言を聞き改めてそう決意して意見書の作成に没頭しました。台湾の製糖業の大成功が台湾の財政自立に大きく貢献することになり、新渡戸はその功績によって次第に日本でも大きな影響力をもつ人物として育っていったのですが、その直接的なきっかけがいま紹介した二人の会話の中にあっただけというのが

私の解釈です。

……こうして桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造はアジアの発展を目指し、戦前日本のグローバリズムに貢献してきました。拓殖大学の草創期を担った彼らによって育まれてきた本学の教育とはどのようなものであったのでしょうか。

渡辺 大正時代の拓殖大学の教学と学生指導に秀でた実績を残した人物に、宮原民平がおりました。宮原は明治三五年（一九〇二年）、開設間もない台湾協学会校に入學、在學中に支那語通訳として日露戦争に陸軍通訳として従軍、兵役によりしばし休學の後、明治三九年七月卒業。その後、支那語の教員として拓殖大学の講師となりました。本学の校歌の作詞者です。

この時代の拓殖大学の精神が「興亜思想」です。校歌第一節にこの思想の精神がよく表れています。作曲者は当時の陸軍軍楽隊長で、多くの文部省唱歌の作曲にかかわった永井建子でした。

右手に文化の炬をかかげ 扶桑の岸に声あげて

闇は消えよと呼ぶは誰ぞ 人は醒めよと呼ぶは誰ぞ
嗚呼輝ける雄渾の姿ぞわれの精神なる

武者が弓を引く時、弓を握るのが左手です。矢をもつのが右手です。武者の右手には、強い力がこめられています。この手に、矢ではなく、「文化のたいまつ」を高くかかげようということですね。

扶桑とは、日本国の別名です。この日本から「闇は消えよ」と叫ぼうではないか。この闇とはなんなのでしょう。当時の宮原を初めとする拓殖大学の教職員や学生たちが感じていたものは、非白人を抑圧する欧米列強のことでした。「誰ぞ」というのは、誰あるうわれわれではないか、という語感です。「人は醒めよと呼ぶは誰ぞ」の「人」とはアジアの民衆のことです。「アジアの人々よ、欧米列強の抑圧をはねのけ、われわれと一緒に解放を叫ぼうではないか」といった感じですよ。

第二次大戦が「侵略」か「解放」か、はたまた「義戦」か「愚戦」か、永遠の論争課題でありましょう。しかし、この大戦が日本を亡国の淵に立たしめると同時に、アジアにおける列強の植民地支配の終焉を掃結したことはまぎれもない事実です。

校歌に謳われている、「しょうかく礪石かの地（荒地地）のアジアに「やがて花咲かむ」と、未来の繁栄を願いながら、敗戦のために志を半ばにした卒業生たちの無念に思いを馳

せ、戦前期における「海外雄飛」の伝統を受け継いで、アジアの「地の塩」たらんとする理念を掲げ続けました。第一〇代総長の矢部貞治が唱えた拓殖大学再興の理念がその象徴です。この理念は、拓殖大学人の心を今なお揺さぶるものとして継承されています。

拓殖大学には矢部貞治が総長の時代に設置された地域研究組織、海外事情研究所があります。その機関誌が現在も発行されている『海外事情』ですが、その創刊の辞で、矢部はこういっています。

「大東亞戦争の世界的成果としてもたらされた、アジア諸民族の解放と独立を確固たる土台の上に充実に確立するため、諸民族が相携えて、アジア固有の文化を高揚しつつ、近代の科学技術を導入し、豊かな未開発資源を開発し、農業を改革し、工業化を推進し、有無相通うむそうつうの通商貿易を振興して生活水準を高め、衛生福祉を向上せしめる事業に、われら日本人が地の塩となって、寄与し奉仕すべき余地が、今ほど拡大している時はない」

後藤新平の台湾開発への回帰でもあります。

コロナが露呈させた日本人の「不作為」

——最後に、これからの国難を乗り越えていかなければならない本学学生に一言メッセージをお願いいたします。

渡辺 目下の世界は、コロナ禍に脅かされております。日本も例外ではありません。平時であれば、存在してはいても社会の表面に出てきて厄介な軋轢をつくりだすようなこともなかった問題、とりわけ富裕層と貧困層との社会的格差の問題が急速に浮上しています。

この社会的格差の問題は、先進国と開発途上国とを問いません。むしろ、最先進国のアメリカにおいて格差と分断とそれに由来する暴力を伴う社会的ヒステリーは、最も激しいのかもしれない。

コロナ後の各国は、これまでより非民主主義的な、あるいは専制主義的な権力をもって国内をまとめるといふ方向に向かうものと思われまふ。国内問題を優先して外国との協調にはさして高い優先順位を置かない、そういう傾向が生まれるように私には思われまふ。直近ではワクチンの国際的争奪戦が起こりそうな気配です。

これからの日本と同様です。しかし、不思議にも日本ほど国家意識の希薄な国は世界でも珍しいと言わざるを得ません。第二次大戦後の七十数年における様々な分野での「不作為」の結果です。憲法改正への不作為があり、日米同盟における日本の不作為もあります。

現下のコロナ禍は、日本人が日本という国家をどういうものとして考えるかを徹底的に問い詰めることになりました。そのためには、まずは国家意識に目覚めなければなりません。

日本は、ある時期までは「自粛」の要請ベースでコロナ制圧に向かうかみえました。しかし、年末から年明けにかけての感染急拡大と医療体制逼迫に耐えかね、ついに東京、埼玉、千葉、神奈川の四知事が政府に対して緊急事態宣言の再発出を要請するにいたりまふ。政府もまた四知事に対して、それぞれの自治体住民の外出自粛と飲食店の営業時間短縮などを求めたのです。

つまり、ここに来て日本では自治体と政府が「相即的」に法的規制を強化する方向に進んでいるかみえまふ。「国家緊急事態」を憲法に書き込む平時の努力を怠りながら、事態が急変するや慌てふためいて法的規制を言い募るのでは情理にかなわなないと私は考えまふ。

衛生とは、後藤新平によれば「衛生法」ともいうべき
法的根拠をもつ国家存立の基盤です。事態の急変に驚い
て手当てをするような類のものではありません。

ワクチンの投与もしくは抗体の獲得を通じて、このコ
ロナ禍はいずれ収まります。しかし、国家緊急事態を憲
法に書き込むことまでが同時に忘れ去られてしまうので
はと私は大いに危惧しています。

緊急事態とは、重大かつ即座に対応しなければならな
い、そういう事態のことです。中国による尖閣諸島侵攻、
北朝鮮の核ミサイル攻撃、南海トラフ地震、首都直下型
地震、テロリズム。国家緊急事態としての対応を迫られ
るテーマはコロナ禍ばかりではないのです。次なる緊急
事態への対応に怠りなきを期すために、一層の議論を重
ねませんか。

『海外事情』一・二月号の紹介

巻頭言／逆境の中でこそ輝く拓殖大学の人材育成 福田勝幸
特集Ⅱ拓殖大学の二二〇年と世界

拓殖大学創立二二〇周年記念

【特別企画】

日米同盟再考——中曽根時代から安倍時代、そして将来——

藤崎一郎・松川るい・森本 敏・川上高司

桂太郎とドイッ 田野武夫
拓殖大学と二人の宰相 長谷部茂

所長インタビュー特別版 歴史の岐路に立った首脳たち
日米首脳関係と同盟発展 兼原信克・谷口智彦

「ジョー・バイデンの米國」と日本の戦略環境 櫻田智人
バイデン外交の理想と現実 杉田弘毅

日本の社会的防衛施設とその歴史的消長 遠藤哲也

歴史人物クローズアップ 蒋介石のなかの日本(中) 岩谷 将

日本海の向こう岸／漂着船とコロナ 荒木和博

東南アジアの明日／普通の国・日本 吉野文雄

世界最新アネクドット／お前はクビだ 名越健郎

日本外交今昔物語／日米同盟問題と伊東正義 丹羽文生

台湾研究センターだより／日月火水木金土と繁休字 渡邊俊彦
書評／古川英治『破壊戦——新冷戦時代の秘密工作——』 名越健郎

田中ひかる『明治を生きた男装の女医——高橋瑞物語——』 村上貴美子

※バックナンバーの注文は、拓殖大学研究支援課
（〇三三九四七〇七五九七）までご連絡ください。